

2. 2021年度 修士論文要旨 (学生番号順)

中学校の運動部活動指導者が捉える生徒の主体性

学生番号22502046 石井 和宏

運動部活動指導者は、生徒の主体性をどのように捉えているのだろうか。これまで中学校の運動部活動における顧問教員が認識する主体性は、具体的な態度や行動として生徒が競技に関心を持ち試行錯誤しながら取り組んでいる姿であると指摘されている(大畑・山本, 2020)。しかし、自由に活動する建前にある運動部活動は、自我意識の発達する中学生にとって具体的な態度や行動にあらわれる以上に主体性に影響を及ぼす。よって、指導者が運動部活動という文脈において広義に生徒の主体性がどのように捉えられているのかについて半構造化インタビューを行い、SCAT分析することから明らかにした。

研究の結果、指導者の捉える主体性は、「指導の方向性」と「生徒の意思と指導者の指導意図の関係」に分類された。「指導の方向性」は、各指導者によってその方向性が異なるものの、勝利や成果を目指すチームの方針となり、生徒はそれに沿った主体的な行動を求められる。また、「生徒の意思と指導者の指導意図の関係」では、①選手の意思と指導者の指導意図が合致している場合、②指導者の指導意図に生徒が従い行動を合わせる場合、③選手の意思と指導者の指導意図が相反し対立する場合、④生徒の意思に従い指導者が生徒の行動を容認する場合に主体性が捉えられていた。例えば、②の場合は、生徒が指導者に盲従する行動をとったり、競技とは関係なく指導者の評価を得るための行動をとったりすることにも主体性が捉えられていた。以上のことから、生徒の自由と指導者の統制の二重性の中で、生徒が対自存在となる場合と対他存在になる場合の両面において指導者が主体性を捉えていることが示された。

Keywords : 主体性, 運動部活動, 指導者, 対自存在, 対他存在, SCAT

保育実践における保育者のズレの認知と保育者効力感

学生番号22502057 田中 修敬

本研究は、保育者の認識と子どもの実際との相違を保育実践におけるズレとし、保育者が実践で抱くズレの認知の特徴と「保育者効力感」との関係性を明らかにしようとするものである。保育実践における子どもとのズレという捉えにくいものを客観的に捉え、保育に対する喜びや自信、意欲といった認知面との関係を質的、量的に分析することは、教育科学的見地から重要な意味をもつと考えられる。

結果として、まず、保育者のズレは「思い込み・決めつけによるズレ」「経験させたい願い・期待によるズレ」「計画の遂行・強い信念によるズレ」「戸惑い・困惑によるズレ」「ありのままの受容によるズレ」という5つに分類された。次に、保育者がズレを認知できるかどうかは保育経験年数に関係がなく、5つのズレの分類はどの群にも見られること、保育経験年数ごとのズレの認知の内容には一定の特徴が確認されること等が明らかとなった。さらに、これらの分析結果を踏まえ、ズレの認知と保育者効力感との関係を量的に分析したところ、ズレの認知があった保育者の振り返りへの意識やズレを認知する自信と保育者効力感との間には、強い正の相関が確認された。ズレの認知があった保育者のエピソードからは、ズレの認知によって、今、ここの思いや計画の必要性に対する意識の変容等があったことも確認された。保育実践の中で目に見えにくく、捉え難い子どもとのズレを意識的に認知することは、保育者の意識変容を促し、熟達化や保育の質の向上に寄与し得る、新規かつ有効な概念となり得ることが示唆された。

Keywords : ズレの認知, 保育者効力感, 幼児理解, 省察, 自己変容

オノマトペを用いたダンス指導の有効性

学生番号22M21001 藪井 琴子

体育科教育において、ダンスは最も指導不安が顕在化される領域であり、その指導不安を解消する手立ての一つに、オノマトペ（擬音語・擬態語の総称）がある。オノマトペを用いたスポーツ指導に関する研究は数多いものの、ダンス領域におけるオノマトペ指導の効果を量的に検証した研究は見当たらない。そこで、本研究では、関心・意欲・態度、主観的運動強度、学習効率の3つの視点から、ダンス指導におけるオノマトペの有効性を検証することとした。研究手法としては、近年急速に進む教育のオンライン化を鑑み、オンラインを用いた実験手法を採用した。検証の結果、関心・意欲・態度の1項目、学習効率の1項目において、学習者に肯定的な影響を与えることが明らかとなった。教育科学の視点から見ると、ダンス指導にオノマトペを用いることの有効性を実証実験により明らかにしたことで、実践的指導力としてのオノマトペの有効性に迫ることができたと考えられる。

Keywords : オノマトペ, ダンス, 指導法, オンライン, 体育科教育

美術系大学・学部における芸術と学問の関係について

—戦後の油絵に関する学科を中心に—

学生番号22M21003 森脇 咲子

本研究は、美術系大学・学部（以下、美大）の教員や学生といった当事者の一部が世代を越えて美大に対する問題意識を持ち続けてきた原因を明らかにすることと、その問題意識を解消するための手立てを提案することを目的とする。本研究では、美大の作家・専門家養成と大学教育の実際を1940年代後半から1970年頃までの各種文献資料や大学研究を手掛かりに把握する。そこから明らかになったのは、美大における教育や研究が、そこで養成すべき作家という存在から発想され、美大の当事者は作家の感性や内面といった個別性を指向することに終始してきたということである。これには一般的な大学にも見られる学問の細分化が関係している。芸術に関する近代の学問は芸術を一種の現象として分析するようになった。学問が分析する芸術的な現象には作家の感性や内面も含まれた。これが作家の個別性を重視する美大の指導体制と整合し、これまでの文芸の創作の主体となった不特定多数の「作者」の側面は芸術の主体から捨棄されることとなった。本研究は美大もまた大学であると発想し、当事者の一部が美大に求めてきた知的一貫性を指向する手立てとして日本大衆文化論のような「作者」の創作に着目する体系的な論考の形成を提案する。日本大衆文化論における芸術は、必ずしも細分化を指向せず、日本の大学にあまり見られなかった流動性を持つ運動としての学問に依拠している。そのため当事者が芸術の主体を作家よりも広い存在として捉えることを可能にする。本研究が取り上げる美大の問題は、高等教育の発想の偏りやそれを検証し是正する必要性を示している。

Keywords : 美術系大学・学部, 作家, 「作者」, 学問の細分化, 運動としての学問, 日本大衆文化論

運動ポイントの理解が鉄棒運動の指導力獲得に及ぼす影響

学生番号22M21006 北原 崇志

本研究では教員養成段階の学生を対象として、運動ポイントの理解、提示資料（映像資料と紙資料）の違い、学習者および指導者の技能レベルの違いが鉄棒運動（逆上がり、前方支持回転）の指導力（「運動共感能力」、「課題発見能力」、「指導課題想起能力」、「指導意欲」）獲得に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。①教員養成段階の学生は、上手にできる子どもに対する指導力の獲得が低い。②3分程度の短時間の運動ポイントの学習であっても、「課題発見能力」、「指導課題想起能力」、「指導意欲」に効果が認められる。③逆上がりの技能レベルが高い者は運動ポイントの理解を通して、上手にできる子どもの課題を把握し、指導するイメージを持つことができるが、逆上がりの技能レベルが低い者は運動ポイントの理解をしても、上手にできる子どもに対して指導するイメージを持つことができない。④逆上がりの場合、技能レベルが高い者は、映像資料により運動ポイントの理解を行うことが、上手にできる子どもへの指導力獲得の上で有効である。また技能レベルが低い者は上手にできる子どもに対する「指導意欲」について、映像資料による逆上がりの運動ポイントの理解を行うことで向上する。⑤前方支持回転の場合、技能レベルに関係なく、上手にできる子どもへの「課題発見能力」、「指導課題想起能力」では、映像資料と紙資料の学習効果は同程度であり、「指導意欲」では、技能レベルの低い者に対して紙資料で運動ポイントの理解を行うことが効果的である。本研究で得られた運動の指導力獲得についての知見は、広く教育科学の発展に貢献するものと考えられる。

Keywords：教員養成段階、鉄棒運動、指導力、技能レベル、映像資料、紙資料

外国にルーツを持つ子供に対する教師の教育支援に関する研究

—指導観に関するインタビュー調査に基づいて—

学生番号22M21008 胡 琦琦

近年、グローバル化の進展に伴い、日本の公立学校に在籍する外国にルーツを持つ子供の数は増加している。数多くの子供たちが日本の教育環境の中で、困難を感じている。日本では、外国にルーツを持つ子供の教育に関する様々な施策が行われており、政策面から、外国にルーツを持つ子供たちの教育の必要性が繰り返し強調されている。子供の困難を解決し、日本の学校生活に適応させるために、学校には、子供に対する支援が望まれており、質の高い教育が期待されている。今までは日本語や学力を身につけさせる学習支援と学校に通わせる就学支援が多く見られる。一方、多文化共生を教育目標として掲げる学校においては、外国にルーツを持つ子供と、日本人の子供たちとが一緒に学ぶことができる環境作りに挑戦しているところもある。すべての児童生徒に、多文化共生の資質を育もうとしている。以上のような状況をふまえると、外国にルーツを持つ子供に対する教師の教育支援に関する研究が必要である。本研究では、外国にルーツを持つ子供の学校教育について、教師による教育支援に焦点を当て、その方法の特質を明らかにするために、X市内における外国にルーツを持つ子供と関わった11名の教師にインタビュー調査を行った。調査によって、外国にルーツを持つ子供のための、教師の支援内容を明らかにすることを目指した。収集したデータを分析した結果、外国にルーツを持つ子供の教育支援をする教師の指導観として、3つのタイプを明らかにした。本研究は、教育科学として、教育方法研究の新たな領域を開拓するにも意義あるものと考えられる。

Keywords：外国にルーツを持つ子供、教育支援、インタビュー調査、教師の指導観、多文化共生

顔真卿および顔氏一族の文字学についての研究

学生番号22M21010 LIU ZHUOYI

文字は社会の発展とともに変遷している。中国の戦国時代に元々文字を独占していた貴族階級の地位が取られ、文字が民間に広く使われることになったため、異体字が大量に誕生した。そこで、当時琅邪に定住していた顔元孫・顔真卿をはじめとする顔氏一族は、古今の經典を引き、文字の分類や校定・楷書の整理統合に大きな貢献をしている。本研究は、楷書字形を正字・通字・俗字という三つの種類に分類した、顔元孫の『干祿字書』と、その字書を碑に正書した顔元孫の甥の顔真卿が書いた作品を研究対象としている。顔真卿の作品の字を集め、用語法の視点からその個々を『干祿字書』を参考に検討することで顔真卿の用字法を明らかにしてみた。整理した結果、顔真卿の作品において、通字は作品の中で限られた意味として使われているのに対し、正字はより多くの意味を持ち、より多くの文脈で使えることがわかった。また、『干祿字書』によって正字の異体字として分類された文字について、正字と異なる意味を持っているため、用語法において正字と全く別字と判断することができる。最後に、官職・地名・年号などの専門用語について、顔真卿は正字のみを使っていた専門用語もあり、正字と通字を併用していたのもあるので、その時代には決まっている書き方がないかもしれないと推測できる。本論文は、考古学の分野のみならず、教育科学としても、漢字・漢文学習や書道教育の点から重要な意味をもつと考えられる。

Keywords : 顔真卿, 顔氏一族, 文字学, 用字法, 用語法, 異体字

上海ユダヤ難民指定地域の設置と実態に関する考察

学生番号22M21011 WU FENGXIANG

1943年2月18日に日本の上海地区陸・海軍司令官は上海虹口地区に「無国籍避難民指定地域」を設置し、そこに1937年1月1日以降ナチスの迫害から上海に逃れてきたユダヤ人を中心とする無国籍避難民の居住・営業活動を限定する布告が出された。約1万4000～1万8000人のユダヤ難民は終戦まで劣悪な環境のもと、多難な生活を強いられた。

そこで本稿は、日本側の外務省文書「民族問題関係雑件／猶太人問題」やその他の関連史料を用いて上海指定地域の設置過程、ならびにその管理の実態と日常生活の実態について分析・考察していく。

そして分析・考察の結果、日本当局による上海ユダヤ難民指定地域の設置は、太平洋戦争勃発に伴うユダヤ人対策変更の必要性から生じたもので、あくまでも日本当局は占領地上海の治安を保障するために、現地のユダヤ難民を監視・管理する要求による発案であり、そこにナチス・ドイツが何らかの影響を及ぼしていたとは考えにくいと結論づけることができる。また、日本当局は反ユダヤ主義ではなく、戦時下の難民対策として上海指定地域を設けており、そこではナチスのような強制労働や大量虐殺は行われていないが、指定地域に收容したユダヤ難民に移動の自由を認めず、その劣悪な環境の故に餓死・病死した人が数百人規模で発生し、難民たちに深い傷を与えたことも見落とすべきではない。

この研究は教育科学、特にその歴史教育分野にとって、史資料の解釈・批判・分析を通じ、オリジナルな観点を取り上げながら、研究対象の真理と本質を発見するという意義がある。

Keywords : 上海ユダヤ難民, 指定地域の設置, 「ナチス・ドイツの圧力・関与」, 「日本政府のユダヤ人監視・管理政策」, 指定地域の管理と実態

中華人民共和国における大学生の専攻選択の性差についての調査

—文理選択と卒業後の就職状況の視点から—

学生番号22M21013 段 国慶

本研究の目的は、中国における大学生の専攻選択の性差の現状、専攻選択時に考慮する事項及び今の大学生のジェンダーに関する意識を明らかにすることである。文献調査とアンケート調査を実施した。

文献調査では、検索エンジン「知網」を用い、「大学生の専攻選択の性差」「文系理系の選択」等をキーワードとして17編の文献を調査対象とした。文系を専攻した女性の割合は9割以上、理工科における男性の割合は8割以上に達することが報告されていた。専攻分野別の男女比から、「女性は文系、男性は理工系」というステレオタイプの存在が指摘されていた。文献調査で用いた文系理系の選択に関する意識調査は2014年までで、調査地域は中国の都市部に限定されている。そこで、中華人民共和国中部地方のA大学を2019年に卒業した学生を対象に、アンケート調査を実施した。アンケート調査の結果では、好きな教科及び高校での文理選択及び大学での専攻選択と性別の間に有意な連関はみられなかった。「男性は理工系、女性は文系」というジェンダーステレオタイプにとらわれず、自身の意欲や能力によって専攻選択が行われ始めており、ジェンダー平等の実現に向け社会の意識が変化しつつあることが示唆された。一方、「就職難のときは、男性は女性よりも職につく権利があるはずだ」、「全体的に見ると、男性は女性よりも優れた政治的リーダーになる」と性別の間に有意な連関がみられる項目が存在し、政治面及び経済面での男性の優位を受容している様子が示唆された。本研究の成果により、教育科学におけるジェンダー平等に関する意識の現状とジェンダー平等を実現するための課題を示すことができた。

Keywords : 大学生, 性差, ジェンダー意識, 文系理系の選択, ジェンダーステレオタイプ

協応運動学習と潜在記憶に関する研究

—非運動経験者を対象として—

学生番号22M21014 河島 駿

心理学の領域では、想起意識を伴う記憶を「顕在記憶 (explicit memory)」, 意識的な想起を伴わない記憶を「潜在記憶 (implicit memory)」と大別されている。潜在記憶に関する先行研究では、わずかな刺激の情報が潜在的、長期的に保持されることが明らかとなっている。

記憶という点から運動をみると、運動技能は潜在記憶に分類される。一方で、運動学の領域では、運動技能は、「記憶」という観点から研究されておらず、3段階説に代表されるような習得のメカニズムに着眼した理論が議論されてきた。運動技能の獲得を「潜在記憶」という点から考究したとき、運動技能の獲得もまた、わずかな刺激の情報が潜在的、長期的に保持される可能性がある。

上記の仮説について検証すべく、本研究ではLOD (Language of Dance) と呼ばれる運動を記号化した運動譜を用いて、運動記憶の長期的な影響の有無を検討することとした。研究手法としては、間接再認手続きを採用し、研究対象者は、被験者の過去経験の影響を極力抑制すべく、非運動経験者とした。実証的実験の結果、わずかな協応運動の記憶が長期的に保持され、その後運動実践に影響を与えることが示唆された。この結果から、学習者の意識的行動を通じた技能獲得を説く従来の運動理論と、それに基づく運動実践を根底から見直す必要性が導き出された。

Keywords : 潜在記憶, LOD, 協応運動, 運動学習理論, 間接再認手続き

加藤周一の日本文化論における翻訳の問題

学生番号22M21015 権藤 智

戦後日本を代表する知識人である加藤周一の日本文化論といえば「雑種文化論」や「土着世界観」が挙げられる。こうした加藤の文化論をめぐっては、さまざまな研究が存在しており、すでに一種の古典の位置を占めていると言っても過言ではない。だが、加藤は後年に日本文化における「翻訳」の問題に精力的に取り組んでいたにもかかわらず、この翻訳の問題はあまり取り上げられることはない。

そこで本研究では加藤の日本文化論について、翻訳という今まであまり注目されてこなかった観点から捉え直すことで、加藤の従来の日本文化論に新たな視座を付け加えることを目指した。『日本文学史序説』において通時的に日本文化を点検するという加藤の試みは、「土着世界観」や「外来思想の日本化」という日本文化を基底とする「変化と持続」を浮き彫りにした。そして、「外来思想の日本化」という異国の文化の「日本化」、すなわち「文化受容」に焦点を当てた時、加藤の「日本文化論」と「翻訳論」が交差するのである。さらに柳父章の「翻訳論」である「カセット効果」論を補助線として、長い漢字受容の文化という「持続」によって、急速な近代化を成し遂げるという「変化」をもたらした明治初期の翻訳を考察する。その結果、「日本文化論」と「翻訳論」について、この「変化と持続」という共通項から、接続がなされ、加藤の「日本文化論」を一種の翻訳論と捉えることができるのである。本研究は教育科学において、日本文化あるいは異国文化に対する理解や尊重といった文化理解教育の発展に寄与できるものだと考える。

Keywords : 加藤周一, 柳父章, 日本文化論, 翻訳論, 土着世界観

日本における文学教育の日本語教育への応用

—中国における日本語教育の課題解決を目的として—

学生番号22M21016 劉 陽

中国における大学専攻日本語教育は学習者の学習目的や、教育内容、方法に「転換」の機が訪れ、教育の内容や教授法、教科書の改革が急務とされるようになった。中国における大学専攻日本語教育の重要な一環として、高学年で行われる文学カリキュラムは、中国における大学専攻日本語教育全体の転換に影響を与える。そして、先行研究によれば、中国における大学専攻日本語教育の一部の教育内容が、日本の「国語教育」を基盤とする文学教育に強く影響を受けたことが指摘されている。

本研究では、中国における大学専攻日本語教育文学カリキュラムを考察した。教育史研究を踏まえ、学習者のニーズへの視座という基本方針を持ちながら、教育目標・教育内容・教育方法の三つ方面にそれぞれ存在した問題点を指摘した。解明された問題点の解決を目指し、日本における文学教育の教育論議を参考にしながら、中国の日本語教育への応用を検討した。教育目標・教育内容・教育方法の三つの視点から転換の過程について思弁的論理を構築した。具体的に言えば、「日本理解」から「異文化理解」への教育目標の転換、近代文学作品中心の教育内容から多様性ある教育内容への転換、結果重視から過程重視への教育方法の転換が明らかになった。日本における文学教育の中国の日本語教育への応用として、本研究では、中国における日本語教育で課題とされた点に即する形でその解決策を日本の文学教育論に求めたが、現場への応用に関してこれからも引き続き研究を行っていきたい。

Keywords : 日本語教育, 文学教育, 転換期, 学習者主体, 異文化理解

ミュージカルによる地域活性に関する一考察

—倉敷市の試みに焦点をあてて—

学生番号22M21017 四宮 貴久

1910年頃から劇作家・坪内逍遙らはアメリカのコミュニティ・シアターの理念を日本の土壌に取り入れようとした。コミュニティ・シアターとは公共劇を指し地域住民がボランティアで創作する演劇である。公共劇について演劇評論家の大山功は「芸術面においてはレベルの低い傾向はまぬがれないが、その社会的機能、文化的意義においては、商業演劇や新劇よりも、むしろ高く広いものをもっている」と述べている。昨今ボランティアの参画者を主体として催される「市民ミュージカル」は、当時の公共劇を現代化したものと言える。本研究では、まずミュージカルが観客に感動を伝えるため構造的にどのような工夫が成されているか、そしてライブシアターの効果について明示する。次に秋田を拠点として70年の歴史を持ち社会問題と対峙しながら日本の民俗芸能を現代化してきた「わらび座」と、ハワイを拠点とするコミュニティ・シアターとして100年以上の歴史を持つ「ダイヤモンド・ヘッド・シアター」の上演作品を比較したところ、共通して1990年代からミュージカルに傾倒していることが判明した。そして岡山での実践として「岡山シンフォニーホール・ミュージカル・ワークショップ」と、明治から昭和にかけて倉敷の礎を築いた大原孫三郎の生涯を描いた市民ミュージカルである「サキガケ〜真友と描いた夢」を考察したところ、両共同体においてレイヴとウエンガーの言う正統的周辺参加が成されていることが分かった。後者のYouTube映像を郷土学習・教科横断的な教材として用いることで「社会教育」と「学校教育」の接点を構築し、視聴した子どもたちから翌年度以降の参画者を期待できることは、コミュニティ豊穡のためのESDだと言える。商業演劇ではないミュージカルの社会的価値、文化的意義を明確にした上で、ミュージカルによって国境を越えて人々と繋がることで、国際的・地域力活性も可能であると提起する。

Keywords : コミュニティ, 地域力, 世代間交流, 社会教育, ESD, ミュージカル

中日農村部小説の比較研究

—農村部女性像を中心に—

学生番号22M21018 丁 元

本研究では、日中両国の近代の農村部小説を研究することによって、両国の農村部小説における女性像の相違点と共通点を考察した。近代が社会制度の変化期であり、農村部は特殊な家族形態と生産方式のため、封建思想が都市部より多く残っている。両国の農村部は封建思想の影響を受けているが近代化の程度は異なって、女性像もそれぞれ特徴がある。日本の農村部小説女性は抑圧されているが、積極的に自由を求める。自由を求める過程で困難にぶつかっても、それでも続けることができる。彼女たちは男性のように学校にも行けず、農作業や家事労働で精一杯である。個人意識が生まれた後も、できるだけ自由を求める。中国農村部の小説に登場する女性は受難者のイメージである。封建思想の貞操観念に殺されたり、封建家庭の奴隷にされたりする。物質的には貧しく、結婚生活も不幸で、善良なのに愚かなのである。個人の意識が生まれても、経済的に自立が難しく、なかなか目覚めない。これらのかわいそうな農村部の女性像から、封建思想の迫害の様相を見ることができた。このことから、当時の知識人である男性作家たちが女性の生活状況にどのような関心を持っていたかが明らかになる。女性の悲劇は時代の悲劇であり、社会の悲劇であることも見えてくる。

Keywords : 農村部女性像, 農村部環境, 女性あり方, 日中婚姻文化, 小説比較

自主夜間中学で学ぶ在日コリアンの学習動機とその背景

学生番号22M21019 河本 清香

本研究は、自主夜間中学に通う在日コリアンがなぜ高齢となっても学校での学びを求めるのか、学びの意欲にはどのような経験が影響しているのか、在日コリアン A さんへのライフストーリーインタビューによって明らかにすることを目的とする。

A さんのライフストーリーを読み解き、歴史的な脈絡と関連させながら分析した結果、A さんの学習動機の背景にあるものは、3つの視点から捉えられることが明らかになった。第1は、「アイデンティティの揺らぎ」、第2は『領事館の友達』との出会いと学習に対する必要感、第3は「自らを表現する場の少なさ」である。

教育現場では、生徒の多国籍化や多様化が進んでいる。多文化共生を目指す学校づくりが促され様々な個性を持つ生徒に対応できる教育が必要とされてきている現在、量的な調査だけではなく、生徒の背景を探り個人の見方・考え方に焦点を当てた研究が一層必要となってくるだろう。本研究は、生徒をある行為や役割に分解して考察するのではなく、人生を全体的に読み解き、学習意欲に繋がるものを探ろうとしている点で新規性があり、教育科学の分野においても重要な意味を持つ。

Keywords : 夜間中学, ライフストーリー研究, 学び直し, 学習動機, 在日コリアン, マイノリティ

箏の指導に見る伝承と普及の現状と課題

— 諸外国との比較を通して —

学生番号22M21020 山路 美保

21世紀に入ってグローバル化が進み、人や物、情報、文化の国際的な移動と各国の相互依存によって、国際社会との関わりはより一層重要性を増してきているが、グローバル人材育成のためには自国の伝統文化に対する理解は絶対に欠かせない。学校教育においては和楽器の学習が導入され、文化庁による邦楽普及拡大推進事業も始まる等、教育現場における実践研究は盛んに行われるようになってきている。一方で、社会教育における箏の指導に関する先行研究はあまり見当たらない。そこで本研究では、社会教育における箏の指導について、箏を「伝承する」と「普及する」ことにどのような違いがあるのか、また「伝承」と「普及」に影響を与える最も重要な要素の一つである「指導」がどのように行われているのか、教育科学の視点からその実態を明らかにすることを目的とした。第一に、箏についての歴史的変遷を「楽器」「表現形態」「指導」から辿った。第二に、現在の日本で行われている社会教育の場での箏の指導の実際と、諸外国の大学やインターナショナルスクールで行われている箏の指導についての理念や指導内容の実際について、指導者を対象にインタビュー調査やフィールド調査を行い、現状を明らかにした。本論文で考察してきた時代による箏の指導の変化は、単に箏曲の音楽の表現形態を変えるだけでなく、箏曲とは何か、箏曲によって何を伝承するかという箏曲の核心にまで影響を及ぼす可能性があることが示唆された。箏曲は元より、伝統文化を存続させるためには、本来我々がもっているような個性を尊重し、さまざまな文化の本質を教授できる社会構造も必要であると考えられた。

Keywords : 箏曲と箏, 伝承, 普及, 指導, 伝統文化, 表現形態

《アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィーア小曲集》 の教材としての重要性について

学生番号 22M21021 福場 みゆ

現在、ピアノ教育において、J.S. バッハ作曲の《インヴェンション》に入る前に、ポリフォニー音楽の導入教材を十分に活用することは、J.S. バッハの作品に対する苦手意識を減らし、完成度の高い演奏技術を学習する上で大切であると考えられている。しかし、その一方でポリフォニー音楽の導入教材において、何が学習者に躓きをもたらすかについては、十分に明らかにされていない。

《アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィーア小曲集》は、J.S. バッハが、妻のアンナ・マグダレーナのために編纂したもので、ピアノコンクールにおいては、小学校低学年から中学年の課題曲として選曲されることが多い曲集である。音楽的にも優れており、学習要素も多岐にわたる。

本研究では、この作品を取り上げ、学習者の躓きの大きな原因である「弾きにくさ」に対し本作品の演奏に必要な「技術的な要素」に焦点を当て、その視点から分析・考察を加える。さらに、長年ピアノ指導をされている方にインタビューを行い、それを踏まえ、考えられる効果的な指導法について提案する。各曲で習得できる技術的要素を「作品の教材性」と捉え、それを明らかにすることにより、ピアノ指導におけるポリフォニー音楽の導入を扱う際の指針となることを期待している。

Keywords: ピアノ教育, 教材性, 指導法, 苦手意識, ポリフォニー音楽

化合物ライブラリー構築及び生物活性評価を目的とした 縮環型複素環類の合成プロセス開発

学生番号22M21022 澤 直樹

生理活性物質の作用機序の多くは、標的タンパク質との相互作用とその機能制御に基づく。複素環化合物は医薬品の基本骨格であることが多く、その母核に有機合成技術を用いて、様々な官能基を導入し、その生物活性を調査することは創薬の方法論として一般的である。これまでに無数の有機化合物が合成されてきたが、それらは天然生理活性物質を含め「化合物ライブラリー」として蓄積され、様々な生物活性試験に活用されている。本研究では、薬剤耐性菌を標的とした「リード化合物」の探索と官能基修飾により、標的タンパク質に対応した新規化合物ライブラリーを構築し、活性化化合物探索の効率化を図った。結果として多様な誘導体合成を可能とする新規合成プロセスを開発した。また共同研究機関における合成化合物の生物活性評価の結果、新規な抗菌活性化合物を見出すに至った。病原性細菌の薬剤耐性は世界的な問題であり、本研究の創薬アプローチがその課題解決に活用されることを期待している。本研究は現代社会で対応が求められる課題解決を目指したもので、教育科学的な視点からも、その意義は大きい。

Keywords : 有機合成, 薬剤耐性, 抗菌剤開発, 化合物ライブラリー, 新規合成プロセス

オルタナティブ教育の役割と意義の検討

—サドベリースクールというフリースクールに注目して—

学生番号22M21023 GONG YUDAN

本研究では、フリースクールの卒業生の経験と語りを分析し、オルタナティブ教育が当事者にとってどのような意義と価値を持つのかを明らかにし、オルタナティブ教育の可能性を探ることを目的としている。フリースクールの捉え方については、近年変化が見られ、「わが国のフリースクールの今後の方向性に関して、フリースクールが不登校問題からの脱却を図って「新しい教育」の可能性の探究へと転換すべきである」という意見がある。フリースクールをはじめとするオルタナティブ教育の新しい価値を見出し、社会に位置づけていく研究が求められているのである。これは、教育科学としても、学校教育に関する研究に新しい視点を提供することから重要な意味をもつ。すなわち、公教育とオルタナティブ教育の対立ではない関係を示すことで、現代学校の在り方を改めて捉えることも期待できると思われる。

オルタナティブ教育が当事者（卒業生）にとってどのような意味と価値を持つのかを明らかにするため、本研究は関西にあるMスクールを取り上げ、半構造化インタビューを使い、卒業生5名にインタビューをした。分析の結果から、Mスクールのようなオルタナティブ教育が、単に不登校の子どもたちの受け皿として機能するだけでなく、自立した心身ともに健康な子どもたちを育む新しい教育であることが明らかになった。すなわち、オルタナティブ教育は全人的な教育を促す機関として重要な役割を担っているのである。

Keywords : オルタナティブ教育, フリースクール, サドベリースクール, 卒業生, インタビュー調査

美術教育における言語表現と非言語表現に関する一考察

学生番号22M21024 平田 琳太郎

本研究は、児童生徒の身体的な表現活動を構成する言語表現および非言語表現の要素の割合等についての調査、考察を基に、成長に応じた表現活動への言葉の影響を明らかにするものである。調査の方法は小中学生を対象に立体物の鑑賞活動を行い、感じたことを言語表現と非言語表現とで行った。その結果、①学齢が低いほど感じ取ったことをそのまま表現することと、②学齢が高いほど感じ取ったことを言語で整理してからジェスチャーで表現することの傾向が明らかになった。また、既知のものと未知のものを鑑賞対象物として鑑賞することで、既知のものであれば①のような表現が増加し、未知のものであれば②のような表現が増加することが明らかになった。本研究での問題意識は、学校教育では、言語表現を通して感じ取ったことを一般化する授業活動が多いことである。言語化できないような感情や考えを他者に伝えるには、言語表現だけではなく、言語以外の方法による表現も重要である。そのため、調査にあたり、児童生徒が非言語表現したものを、言語から想起したと考える表現として例示動作、言語以外から表出した表現を感情表出動作として分類した。加えて、発達段階の整理を行うことで、言語表現と非言語表現は学齢を通じて成長していくことを述べ、本調査においても同様の傾向を示した。

教育科学においても、非言語表現を通して児童生徒が感覚や知識や経験知と照らし合わせながら、作品から感じ取りを行うことは、個人にしかない感情や思いを表現する契機となりうる。また、異なる言語を扱う人とも交流をはかることができる点においても効果が期待できよう。

Keywords : 美術教育, 言語表現, 非言語表現, 発達段階, ジェスチャー

教員養成改革の因果推論

学生番号22M21025 新宮 健太

本研究の目的は国立の教員養成系大学・学部の再編・統合が将来の教員にふさわしい優れた人材の確保に資するのかどうかを実証的に明らかにすることにある。国立の教員養成系大学・学部の入試倍率は全国的にみて年々低下傾向にあり、将来の教員たる学生の基礎学力の低下が危惧されている。そこで、本研究は X 大学・Y 大学の教育学部における共同教育課程の設置が両大学の教育学部の入試倍率に与えた因果効果を準実験手法の一つである合成コントロール法 (Synthetic Control Method) によって推定する。本研究の主要な分析結果は以下の通りである。X 大学と Y 大学の教育学部に共同教育課程が設置されたことによって、両大学の教育学部の入試倍率が低下した。さらに、頑健性の検証のために DID (差の差法) による推計を行ったところ、合成コントロール法による分析結果と概ね整合的なそれが得られた。こうした結果は、国立の教員養成系大学・学部の再編・統合が将来の教員にふさわしい優れた人材の確保という当初の期待とは異なる結果をもたらす場合があることを示唆するものである。

Keywords : 教員養成, 共同教育学部, 合成コントロール法, DID (差の差法), 統計的因果推論, EBPM

薬剤耐性菌を標的としたヒスチジンキナーゼ阻害剤開発

—AI を利用した分子設計と構造活性相関の調査—

学生番号22M21026 勝本 崇臣

18世紀以降、多くの抗生物質の発見により、感染症の予防・治療法が飛躍的に進歩している一方で、抗菌薬に対し抵抗性を示す薬剤耐性菌の出現が問題となっており、既存の抗菌薬での治療が困難な感染症が増加している。この状況に対策を講じなければ、2050年には薬剤耐性菌による感染症の死者数は大幅に増加することが予測されている。

本研究では医薬品候補化合物探索・設計シミュレーション技術AI-AAMを活用した、新規抗菌薬としてのヒスチジンキナーゼ (HK) 阻害剤開発を行った。AI-AAMは人工知能を利用した新技術であり、従来の方法とは異なる分子設計が可能である。このようなシミュレーション技術は、今後の創薬プロセスに必要不可欠とされている。このAI活用は生物評価系と協働した異分野連携プロジェクトとして進められており、薬剤耐性という世界的な課題に挑むことも含め、その教育科学的意義は大きい。筆者は細菌の二成分シグナル伝達系 (TCS) 中のHK阻害を標的とした新規抗菌化合物について分子設計を行い、誘導体の合成、評価系へのサンプル提供及び構造活性相関の調査を行った。合成化合物の生物活性評価の結果、高活性誘導体を見出すに至った。

Keywords : 薬剤耐性, 有機合成, 二成分シグナル伝達系, HK 阻害剤, AI 技術, 分子設計

幼児のネガティブな感情表出に対する保育者の捉え方と援助

学生番号22M21027 小林 優香

本論では、保育現場における幼児のネガティブな感情表出に対する保育者の捉え方や援助を明らかにした。幼稚園や保育所等は、幼児が初めて家族以外の他者と対人関係を築く場であり、幼児は様々な感情を経験する。その時、幼児が無理に感情を抑制することなく、適切な感情表出の方法を身に付けるためには保育者の援助が不可欠である。したがって、保育現場における幼児のネガティブな感情表出に対する保育者の考え方を明らかにすることは、保育者の援助等の改善点を実証的に示すことが期待でき、教育科学的意義をもつと言える。具体的には、第1章で感情表出等に関する先行研究をレビューした。その上で、第2章から第4章において保育者への質問紙調査を実施し、保育場面、保育経験年数、保育者の信条による幼児のネガティブな感情表出に対する考え方の違いを探るため、KH Coder等による量的分析を行った。その結果、捉え方に関しては、保育場面を除く、保育経験年数、保育者の信条において違いが見られた。また、援助に関しては、全てにおいて違いが見られた。特に、熟練保育者が、幼児のネガティブな感情表出をやや否定的に捉える傾向にあることから、全ての幼児がネガティブな感情表出の方法をより良く学ぶために、熟練保育者に対して幼児理解に関する啓発が求められると考察した。本研究の成果が一般化できるものであるかの検討や、熟練保育者に対する啓発内容や方法の検討が今後の課題である。

Keywords : 感情表出, ネガティブ感情, 幼児理解, 幼児, 保育者

算数・数学の授業における数学的思考の育成に関する日中比較研究

学生番号22M21028 覃 小慧

近年、中国では、新カリキュラム改革の実施に伴い、小学校の数学教育モデルが変更され、数学的思考の鍛錬がより重視されるようになってきている。小学校の算数教育の過程で、授業の効果を上げるため、また、児童が数学的思考を分析する意識と能力を向上させるため、数学的思考を育成することは非常に重要である。本研究の目的は、日本の小学校算数科の教育方法と、その特徴や長所を研究・分析することによって、小学校における数学的思考の育成に関して、中国で取り入れるべき指導方法を探ることである。本研究では、まず、数学的思考の基本構成要素と小学校における数学的思考の重要性を説明し、中国の小学校数学教育における学習過程を明示する。次に日本と中国の小学校算数（1～4年生）のカリキュラム指導を比較・考察し、両国の教育理念や内容を理解することを試みる。さらに数学的思考の観点から、日本と中国の教科書（乗法計算、面積計算、分数、小数の初歩的認識）および関連コンテンツの授業を比較・分析し、両国の教育現場に埋め込まれた教育理念や指導スタイルの違いを明らかにする。これらの考察を通じて、中国の教育現場が日本の教育現場から学ぶ価値のある数学教育方法を明らかにし、それを実践することで中国の数学教育のさらなる発展が期待できると考えている。

キーワード : 数学的な思考, 数学教育, 比較研究, 小学数学, 思考育成

INTEGRATION OF LESSON STUDY IN TEACHING PRACTICE OF SOCIAL STUDIES STUDENT TEACHERS TO IMPROVE THE QUALITY OF LEARNING AND PROMOTE A SUSTAINABLE LESSON STUDY

Student Number22M21030 AGBI Richard

The study was about how lesson study can be integrated into the teaching practice of social studies student teachers to improve the quality of learning and to promote a sustainable lesson study. The lesson study technique is a key concept in teaching and learning. It helps to bridge the gap between content and practice. Failure to apply this technique correctly may result in ineffective teaching and learning. This study, therefore, intended to bridge this gap. Even though there are several academic researches concerning integration of lesson study in teaching practice of student teachers, more research is needed in order to support the development of educational science.

Data collected was analyzed not to generalize but to explore the possibilities and the challenges to integrate lesson study into teaching practice of social studies student teachers by examining teacher educators' and in-service teachers' personal beliefs, practices, and struggles. Results show that there are potential advantages of integrating lesson study in pre-service teacher education (teaching practicum), as compared to the conventional pre-service teacher education. For smooth integration of lesson study in colleges of education syllabi in Ghana, the researcher proposed a model of integration of the technique particularly during teaching practices encouraging social studies teachers to teach effectively.

Keywords : integration, lesson study, teaching practice, social studies, pre-service teachers

第三の場としての公共図書館の可能性

—公共図書館職員へのインタビュー調査に基づいて—

学生番号22M21031 西森 愛

学校は、学習機会と学力を保障する役割のみならず、心身の成長を保障する居場所・セーフティネットとして機能していく必要があるが、学校を居場所と感じていない子どもがいるという現状から、学校は必ずしもその役割を十分に果たしているとは言えない。そこで本研究では、どの地域にもある社会教育施設であり、地域住民の近隣社会を構成する一つである公共図書館に焦点を当て、公共図書館への施設訪問と職員へのインタビュー調査を通して、公共図書館が第三の場となる意義について明らかにしようとするものである。これは、教育科学としても、図書館を活用することで各自の課題解決につながり、次のステップに進むことができれば、経済的困窮の解決や自己認識の向上への示唆を得ることができるという点で重要な意味を持つ。

3つの公共図書館とその職員5名に調査した結果、第三の場の分類の中でも目的交流型とマイプレイス型を同等に重要視している図書館職員とマイプレイス型を比較的重要視している図書館職員がおり、その背景には各館が持っている機能の違いがあると考えられる。さらに、公共図書館が第三の場となることで、多くの人々が来館するきっかけとなり、公共図書館という場・空間とそこで行われる多様な取り組みを通して、人づくり、地域づくりの新たな場所としての役割を果たしていることが明らかになった。

Keywords : 公共図書館, 第三の場, 社会教育, インタビュー調査, 地域

パートナーとの関係づくりをテーマにした 性に関する指導の授業開発

—性に関する社会的な価値観に焦点を当てて—

学生番号22M21032 巻幡 楓花

本研究は、男らしさや女らしさという性に関する社会的な価値観に焦点を当て、パートナーとの関係づくりにつながる授業開発をすることを目的とした。

授業開発の基礎資料として、中学生を対象としたパートナーとの交際をテーマにした教育実践を整理し、これまでの実践の傾向を把握した。その結果、これまでの実践では、男女交際の事例など性に関する身近な問題を考えることを通して、自他を大切にするための態度や行動の変容を目指す傾向にあること、性に関する社会的な問題を扱った実践は少ないことが明らかになった。

性に関する社会的な価値観や性の多様性を取り入れた授業開発を行い、大学生を対象に実践及び評価を行った。性役割観とデートDVの関連に気付いた人、相手を尊重しようという意識を持った人の割合が増加し、本授業はデートDV被害を未然防止する基盤をつくるという観点で成果があったと考えられる。

今後、学校教育の中で性役割観が個人の言動に及ぼす影響について考える機会を取り入れ続けていくこと、相手の気持ちを尊重しつつ自分の気持ちを伝え合うといった関係づくりに必要なスキルを取り扱うことも必要であると考えられた。本研究は性に関する指導の実践に活用できる資料となり得るものであり、教育科学分野の研究といえる。

Keywords : 性に関する指導, デートDV, 性役割観, 授業開発, 中学校

小学校音楽科における歌唱共通教材の選定基準の検討

学生番号22M21033 岸本 未有

本研究は、音楽教員の歌唱共通教材の捉え方及び児童の音楽的嗜好について調査・分析を行い、今を生きる子どもたちに教える曲は、どのような曲が相応しいのかについて検討し、小学校音楽教科書における歌唱共通教材の新しい選定基準を提示することを目的とするものである。

まず、小学校音楽専科教員へのインタビュー調査、小学校5・6年生の児童を対象とした、歌唱共通教材や教科書掲載を希望する提案曲の印象調査を行った。その結果、教員自身も「古い」という認識を持っており、ゆったりした曲調の唱歌に対して児童の反応が悪く、取りかかりにくい等の問題意識を持っていた。また、子どもたちは、「メロディー」、「テンポ」、「リズム」に関心が高く、わらべ歌や日本古謡を含む多数の歌唱共通教材には、意欲や関心が低いことがわかった。提案曲では、「メロディー」、「詩やことばへの共感」、「幼少期から聞き覚えがある曲への共感」が理由として示された。

以上の調査・分析から、今を生きる子どもにふさわしい曲について、以下4点の特徴が見い出された。①明るくリズムカルな曲調、②季節感のある曲、③わかりやすさ、④詩やことばに共感できること。また、子どもは自身の嗜好をもとに曲の特徴を捉える力を有しており、それ故、自分でお気に入りの曲を見つけられることがわかった。従って、大人が子どもの愛唱歌を決める必要はなく、むしろ共通教材に、曲選択の自由をもたせること、子どもの嗜好に寄り添った選曲が必要であると考えられる。本研究は、子どもの歌の嗜好や子どもの歌と音楽文化のあり方に検討を加えているという点で、極めて意義深い。

Keywords : 歌唱共通教材, 唱歌, 教師, 子どもの嗜好, 印象調査, 音楽教育

中国の小学校における素質教育に関する研究

—総合実践活動での応用を中心として—

学生番号22M21034 賈 蘊菲

本稿では、中国の素質教育について、中国の素質教育に関する理念を分析し、教育の実施プロセスにおいてどのように変遷するのかを解明した。総合実践活動が制定された前の素質教育の実状、総合実践活動が制定されてからの基本理念、課程目標、課程内容を明らかにした。また、素質教育の実験区として、天津市小学校の教育現場において、四つの小学校の実践例を挙げ、学校はどのように特色を生かし、素質教育を総合実践活動に応用しうるのかについて考察を行ってきた。さらに総合実践活動の評価基準に基づき、天津市小学校において総合実践活動における学習評価、総合実践活動が求められている教員の資質や教員に対する評価について解明した。最後は日本の総合的な学習の時間の学習過程、特にポスターセッションや振り返りを参考にしながら、今後中国の総合実践活動における展望について、実践可能な授業提案を行った。これは、教育科学としても、生徒の全面的な成長を促すという点から重要な意味をもつ。

今後の活動の展望について、総合実践活動の実施に伴い、教育現場で浮かび上がった問題を検討する。特に教育課程の設計について、本研究でとらえたポスターセッションを実際に天津市の小学校で展開し試みる。天津市の私立小学校で「総合実践活動」における指導法や実践可能な授業提案を行いたい。

Keywords : 素質教育, 総合実践活動, 研究性学習, 評価, 総合実践活動の指導力

高等学校における正弦関数に関する循環論法の解消とその方法について

学生番号22M21035 石黒 直

高等学校の教科書内における $\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\sin x}{x} = 1$ の証明は循環論法になっている。本論文では、高校生にも十分に理解できる循環論法にならない証明を与える。

§1では教科書内における証明の問題点を紹介したのち、その問題点を解決する有名な証明をいくつか紹介し、それらの問題点を紹介する。§2から§5までは§6で行う証明の準備として、実数の連続性公理の整理、数列や関数の連続性、極限の定義や性質の証明、定積分の定義や性質の証明、導関数の定義や性質の証明をそれぞれ行う。特に、§2と§3ではまず実数の順序集合としての性質のみで考えることが可能な性質のみを考え、その後、体としての性質が必要な範囲においては、演算を導入して考える。

§6では曲線の長さを定義したのち、それをを用いて逆正弦関数を定義し、その逆関数として正弦関数を定義する。そして、三角関数の性質を証明し、その性質を用いて自然かつ厳密に $\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\sin x}{x} = 1$ の証明を行う。

そもそも今回の問題の根本にあるのは初等教育から行われている角度の定義が曖昧であることであり、これを問題視し、深く考えることはこの定理に関する理解が深まるだけでなく、矛盾が起きない限り定義は多様であることや、定義の重要性を理解することに繋がる。これは教育科学的にも非常に意義のあることであると考えている。

Keywords : 高等教育, 数学教育, 正弦関数, 循環論法, 逆正弦関数

多様化する結婚に関する高校生の意識

—高等学校家庭科における授業開発—

学生番号22M21036 田邊 詩歩

本研究は、多様化する結婚に関する高校生の意識を明らかにするとともに、高等学校家庭科における結婚についての授業を開発することを目的として、先行研究の分析、学習指導要領と教科書の分析、質問紙調査を行った。家庭基礎の教科書を分析した結果、多様化する結婚に関する内容や多様な性のあり方についての内容が多く扱われるようになり、日本の結婚をめぐる現状や変化を反映した内容になっていることが明らかになった。一方で、教科書によって法律や語句の記載の有無に差がみられ、発行されている10冊すべての教科書が多様化している現状に対応した内容を十分に扱っているとはいえなかった。質問紙調査の分析結果より、高校生は現代の多様な結婚のかたちに興味や関心を持ち、容認している傾向がみられた。一方、自分の将来の結婚に関しては、依然として固定的な性別役割分業意識に基づく考えを持っていることが明らかになった。以上を踏まえて、高校生が将来経験すると考えられるライフイベントの1つである「結婚」に焦点を当て、家族の法制度および多様な結婚や家族のあり方について理解するとともに、生徒一人ひとりが自分の将来について結婚も含めて考え、より良い未来を創造できる授業を開発した。多様化している結婚の現状を踏まえた授業を開発することは、高校生にとって意思決定の際の選択肢の幅を広げ、将来の生活設計を考える際に役立つという点で教育科学的にも重要な意味をもつと考える。

Keywords : 結婚, 高等学校家庭科, 学習指導要領分析, 教科書分析, 授業開発

小学校通常学級に在籍する1型糖尿病患者児の連携支援体制 における養護教諭の役割と課題

学生番号22M21037 陳 依文

1型糖尿病患者児は学校生活においてインスリン注射や低血糖、友人や教員の理解といった課題に直面している。そのため、学校、家庭、医療機関等の連携を強化することが不可欠である。養護教諭は保健に関する専門知識や技能を活かし、連携体制を構築する役割が求められている。本研究は、先行研究(22編)を分析したうえで、養護教諭(6名)を対象とするインタビュー調査を行い、1型糖尿病患者児の支援に対して養護教諭が行う連携の実態を検討し、効果的な連携の在り方について明らかにした。その結果、養護教諭は【身体的なケア】、【心理的な支援】、【教職員との連携】、【クラスメイトへの理解教育】、【保護者との連携】、【医療機関との連携】を実施した。患児の自己管理能力の育成、教員と情報共有の機会の増加、保護者と連携する際の学級担任のサポートが必要となっている。また、医療者との連携不足を解消するため、「学校生活管理指導表」等ツールを用いる連携システムの構築が期待される。

キーワード : 1型糖尿病, 通常学級, 連携体制, 養護教諭, 役割

小学校における朝の会の合唱活動の意義に関する研究

学生番号22M21038 岩見 紘斗

近年の教育現場は、活動の内容や取り上げ方に対して、その関連性や採用の根拠等の説明が求められている。しかし実態は、説明責任を果たせていない領域は未だ多いと考えられ、中でも小学校現場で行われている「朝の会の合唱活動」に関しては、顕著だといえる。そこで本研究では、朝の会で合唱を行うことの意義について、音楽教育のみならず、人文科学・自然科学分野等を含めた複合的な視点から考察した。また同時に、小学校の教員や教員養成課程の学生に対して、「朝の会の合唱活動」に関する3種類の質問紙調査をすることで、実態把握を行い、「朝の会の合唱活動」の改善案の検討を行なった。

複合的な視点から考察を行い、現場の声も参考にした結果、「朝の会の合唱活動」の意義は、「仲間意識や一体感・連帯感の醸成」、「明るく安定した精神状態や学級全体の良い雰囲気への移行」の2点であることが示された。さらに、複数の質問紙調査の分析から明らかとなったことは、現場の担任教員には、①歌唱・合唱指導に対する苦手意識が大きい者が多いこと、②朝の時間帯は多忙であること、③担任の歌唱指導への知識・理解不足、④合唱に対する意義や認識の差が大きいことの4点である。これらの問題点を改善させるためには、大学の教員養成課程において、「教育活動の意義を考えさせる教育」と「発声教育」の2つの教育が必要であると提案する。これらの結果から、「朝の会の合唱活動」を実りあるものとするためには、ここで挙げた意義を教員間で共有し、また同時に、現場の担任教員が抱える課題の解決と「朝の会の合唱活動」に対する理解度向上が求められると考える。

Keywords : 小学校教育, 朝の会, 合唱, 教育意義, 科学的根拠, 教員養成

子どもの主体としての育ちを支える〈受け止める〉についての 実践学的考察

学生番号22M21039 魏 梓羽

本研究は、知的障害のある一人の子どもと支援ボランティアである筆者の遊びの事例についてエピソード記述化したものを考察し、子どもの主体としての育ち、及び、子どもの主体としての育ちにおける、他者による「受け止める」ことの意義を明らかにすることを目的とした。なお、関与観察の中で、鯨岡(2006)の示唆を受け、本研究は、障害のある子どもの特徴的な行動だけを取り上げるのではなく、一個の主体として、子どもが生きる姿を描き出すことを目指す。それを基に、より良い関わり方を見つけてという問題意識を持ち、エピソード記述を分析した。その結果、子どもを主体として受け止めることにより、子どもと通じ合う体験が増えてくることが明らかとなった。ただ、いつでも通じ合えるというわけではなく、やはりコミュニケーションが難しいと思う時もある。その難しさは、思いと思いの重なり部分が狭いということかもしれない。しかし、経験を重ねるうちに重なり部分が少しずつ広がってくる。そうみると、子どもの思いと関わり手の思いが重なる時、また、子どもの思いが叶えられる時、コミュニケーションすることが容易になる手があるように見受けられた。本研究は、共に生きる他者との関係性に子どもの発達を位置づけ、そこで起きていることをさらに精緻化して描こうとする点において、教育科学の発展に寄与する。

Keywords : 障害のある子ども, 主体としての育ち, 受け止める, 関与観察, エピソード記述

歴史的意義に関する子どもの思考についての日中比較研究

—高校生に対するインタビュー調査に基づいて—

学生番号22M21040 LIU XU

本研究の目的は、日本と中国の高校生が日中関係史について、何を、なぜ重要だと考えるのかを明らかにすることである。

本研究の調査は、日本と中国の高校1年生から3年生までの50人を対象に、半構造化インタビューを用いて明らかにしたものである。英米歴史教育研究における分析枠組みと研究方法を用いることで、本研究は、日本の生徒が(1)現代とのつながり(2)他国における死(3)平和という三つのテーマで構成されるテンプレートで、中国の生徒が(1)国家の恥・苦痛(2)正義・危機感・奮闘(3)交流・平和という三つのテーマで構成されるテンプレートで歴史的出来事を説明していた。

本研究の結論は、中国の生徒は国家の恥を忘れるべきではなく、歴史の教訓を銘記し、未来を明るく見ようという未来志向性の姿を表明したが、日本の生徒は歴史的事象が現代社会にどのような影響を与えるのかということに重視した。これらを踏まえると、教育科学としても、重要な意味を持つ。本研究は、教育科学を通して、国際問題の解決を目指そうとするものであると言えるだろう。

Keywords : 歴史的意義, 国際理解, 歴史教育, 高校生, 質的研究

幼児期の園生活における経験と将来的な信頼感等との関連について

—保育者との関わり・遊び経験に着目して—

学生番号22M21041 梅本 菜央

幼児期は人格形成の基礎を培う重要な時期であるとされる。幼児期が重要なのであれば、幼児期の経験によって、将来的な自分や他者への捉え方が異なる可能性が考えられる。そこで、本研究では、幼児期の園生活における保育者との関わりと遊び経験に着目し、将来的な信頼感等の関連を検討することで、将来的な信頼感等につながる幼児期の園生活での望ましい経験を明らかにすることを目的とした。まず、研究1において、幼児期の園生活における保育者との関わり、遊び経験を問う項目を作成し、尺度化を行った。そのうえで、研究2を実施し、信頼感、内的作業モデルとの関連を検討した。分析の結果、保育者からの受容経験や保育者への好意は自分や他者への信頼を高め、自分への信頼を介して不安を低くすること、他人への信頼を介して不安、回避の両方を低くすること等がわかった。遊び経験については、他者と関わり合う遊びや遊びの多様性は、自分や他人への信頼を高め、自分への信頼を介して不安を低くすること、他人への信頼を介して不安、回避の両方を低くすること等が示された。これらの結果から、保育者からの受容経験や保育者への好意、他者と関わり合う遊び、創造的な遊び等は、自分への信頼や他人への信頼を高めており、幼児期における園生活において経験することが望ましい経験であると考えられた。また、幼児期の園生活における経験は、信頼感を介して内的作業モデルにも影響することも示された。

Keywords : 幼児期, 保育者, 遊び経験, 信頼感, 内的作業モデル

運動部活動における「恋愛禁止」を女子生徒が受容する過程

学生番号22M21042 本田 桃子

これまで、部活動における指導者と生徒の関係は「体罰」や「ハラスメント」問題を起点として語られることが多かった。しかし、これらにも分類されない理不尽な規則が学校には多く存在(ブラック校則)していることが、近年注目されている。なかでも、運動部活動における理不尽な規則は多いにも関わらず、十分に研究されていない。そこで本研究は、生徒の人権やジェンダーに深く関わる「恋愛禁止」に着目し、当事者へのインタビューを通して女子生徒がいかに「恋愛禁止」を受容していくのかについて、その意味づけ過程を明らかにすることとした。

研究結果として女子生徒が「恋愛禁止」を受容する過程は、【入部動機と「恋愛禁止」】【「恋愛禁止」の受容】【「恋愛禁止」の呪縛】に大別され、各コアカテゴリーの中に11のサブカテゴリー《入部の動機》《「恋愛禁止」の認知》《監視のまなざし》《女性らしさの放棄》《勝利至上主義》《周囲との関係》《葛藤》《「恋愛禁止」以外の理不尽な規則》《試合の結果》《指導者への認識》《ジェンダー観》と、25の概念が認められた。このことから、「恋愛禁止」を受容する過程において生徒は、指導者との関係性の中で勝つことが最大の目的とされ、「恋愛」が勝利の阻害要因であると刷り込まれながら受容していく。そして、自身の感情を制御することで「恋愛」することを抑制するようになり、恋愛ができないような思考へと自らを呪縛していく過程が明らかとなった。この指導者との関係には、競技を媒介としたより広汎な上下主従の継続的な結合関係が生じており、日本的な家元制度と同様の特徴を有していることも示唆された。

Keywords : ブラック規則, 恋愛禁止, 勝利至上主義, ジェンダー, M-GTA

親子を対象とした主権者教育の原理と方法に関する研究

学生番号22M21043 渡部 佑香

本研究は、家庭での主権者教育のより一層の充実を目指し、小学生・中学生とその保護者を対象とした主権者教育のあり方を追求して、親子で政治や選挙について考え、話し合うことができる主権者教育プログラムの開発のための原理と方法を解明しようとするものである。平成27(2015)年の選挙権年齢の引き下げ、令和4(2022)年の成人年齢引き下げを受け、主権者教育がこれまで以上に注目されるようになってきている。文部科学省は、令和3(2021)年に家庭での主権者教育を推進することを報告している。本研究では、家庭での主権者教育でも、特に親子向け主権者教育に注目することとした。教育科学としても、将来の社会を担う一員として必要な資質能力を十分に育成するために、家庭での主権者教育の充実を目指すことができるという点から重要な意味を持つ。

本研究では、第一に、文部科学省や総務省が作成した資料に基づき、小学校・中学校における主権者教育の位置づけと育成を目指す資質能力を明らかにした。そして、第二に、これまで作成された小学生・中学生を対象とした主権者教育の学習教材や教育プログラムを基に、小学生・中学生を対象とした主権者教育の単元で扱う内容と方法について明らかにした。第三に、親子向け選挙啓発教材から、親子向け主権者教育で扱う内容について考察し、親子向け主権者教育プログラムとして、選挙と政治を取り上げ、模擬選挙を行う動画教材を開発した。

Keywords : 主権者教育, 親子向け, 小中学生, 動画教材, プログラム開発